

子どもと向き合う教育、教師の仕事

——いじめ問題とかかわって——

法政大学非常勤講師（多摩）・元東京都中学校教員 宮下 聡

（1）中学校の困難な現実

最初に中学生の様子をお話しします。高校で実習する人は自分が高校生だったのが3年くらい前ですから、まだ印象が残っているでしょうが、中学だと6年前になります。あれからずいぶん成長したでしょうから、簡単には中学生の心のモードにはなれないだろうと思います。ですから、私が今から話す中学生群像を聞いて昔を思い出して、実習に臨んでいただければと思います。

まず最初、現代の中学生にみられる“問題”行動。この「問題」とは、教師目線の問題です。教師から見たら、こういう問題があるよという意味です。生徒目線で見たら、それは全然違ったものに見えてくるかもしれません。

まず、当然できるはずのことができない、起きるはずのないことが次々に起きる。例えばチャイムが鳴って授業が始まるわけです。チャイムが鳴ったら、みんな教室に入って席について、教科書、ノートを出して、先生が来るのを待っているはずですが…、皆さんはちゃんとやっていたか。実は私が去年まで勤めていた学校では、チャイムが鳴って教室に行くと、全員座っているんですよ。すごいですね。しかし、以前勤めていた学校はそうではなかったです。チャイムが鳴って上のほうに上がっていくと、廊下にまだ休み時間モードを引きずった連中がいっぱい鈴なりになっていました。それを「おーい、チャイムだぞ。入れ」と追い立てます。「席つけ、教科

書、ノート出せ」と言います。羊飼いたいみたいです。

中には「先生、オレが入ったって、あいつが入らなかつたらしょうがないでしょう。先にあつちを注意してよ」と席につかない。また話をしないで先生の話聞くことができない。忘れ物もフツーのこと。

それから、家庭向けの印刷物なんかを渡したら、これが届かない。全員に届けるために、「きょうプリントを配ったので見てください」という電話連絡網を回すなんていうバカなこともときにはある。もう挙げたらキリがありません。

それから、先生に、死ね、キモい、ウザい、消えろ、ジジイとか、こういうことを平気で言います。私も言われました。ある女性のとてもすてきな先生が、「きょうのはこたえたわ」とつらそうな顔をして職員室に戻ってきたので、どうしたんですかと聞いたら、「古いぼれ」といわれたそうです。だんなが建築作業員で、家に帰ってそのことを話したらカンカンになって怒って、「おれの大事なカアチャンに何ということをするんだ。おれが話をつけに行く」「あなた、やめて」、こういう状態になったみたいですが、たいした罪の意識なく本当にひどいことを言います。

それから起きるはずのないことが次々に起きる。ケンカや暴力。ひどいのは、階段の前を歩いている子がいて、急いでいるからといって、「どいて」と言えばいいのにドーンと突き落とってしまう。それから4階のベランダ

の手すりに腰を下ろして、足をブラブラさせていたら落っこちたとか。本当に心配で目が離せません。こういう子どもたちとのバトルです。さあ、皆さんが行く学校はどうでしょうか。

(2) 心がなかなか通じない

でも、そんなことよりもっと深刻なのは、子どもと心が通じあわないことです。例えば、今いじめの問題なんかで、教師は「いじめられたら言ってね」「何でも相談してね」と子どもに言いますね。ところが、子どもは言いに来ません。

指導すると、子どもはよくなるはずなのに、逆にどんどん悪くなると思えることもあります。例えばいじめがあったときに、「何でいじめるんだ、だめじゃないか。約束しろ、もうやるな」「はい」「謝れ」、教師は全力でこう指導しますが、そうやって注意してもなくなりません。今度はもっと強く指導します。こんなことを何回も何回も繰り返していると、いじめは見えにくく潜行してモンスター化します。

また、この指導を繰り返していると、子どもはだんだん心を閉ざしていきます。人間ってそうじゃありませんか。自分のことを否定的に見ているなと思ったら、その人には心を開かない。もう心のドアを閉めるしかないでしょ。そうすると、最初の頃は「ちょっと来なさい」と言ったら、「何？」と言って来たのが、「ちょっと来なさい」「何？」「いいからおいで」「だから何！」「いいから来い！」。こうなって、プツッとキレてバトルに…、なんてことも起きます。「ハァッ…？オレだけかよ。決めつけてんじゃねえよ」、こんなふうに関き直って突っかかりたりもしてきます。

でも、もっと深刻なのが、子どもに自主性、やる気が感じられないことです。悪さをしてる分には、まだいいんです。やった行為で

子どもとかかわりが持てますから…。ところが、全然やる気がなくて、授業にも参加する気がなくて、という子。では何もしないかという、目を盗んで落書きをしたりガムを食べたりします。

それで「何でガムを食べてるの」と注意したら、「いや、ベツに。ポケットに入ってたから…」「まずいだろう」「いいじゃん」。「いいじゃん」と「ベツに」で何でもできちゃう。それしか言えない。

私たちはこれを「いいじゃん病」と呼んで警告しました。「近頃こういう大変恐ろしい病気がはやっている。感染、発病すると、まわりに流されて、自分でも説明のつかない行動を取るようになる。大変感染力が強くて、潜伏期間が短い。恐ろしいことに、発病しているのに本人の自覚症状がまったくない。」こういう子どもの心をどうやってこちらに引き寄せるかというのは、結構ワザが必要です。

皆さんの場合は、真剣に訴えればきっと聞いてくれるかもしれません。珍しい新鮮な存在ですからね。慣れてきてマンネリ化するとだんだん話を聞かなくなるのです。

(3) 思春期の自立の課題

中学生という時代が、深刻な問題（事件）と結びつきやすいのは、この時代が子どもの思春期にあたっているということと深い関係があります。

いじめで自ら命を絶つ子の事件が後を絶ちません。ここに 2007 年くらいまでに新聞報道された、いじめで死んだ子のリストがあるのですが、1975 年から 2007 年の 2 月 1 日までの段階で、157 人の子どもが何らかの形で自殺をしています。そのほとんどが中学生なんです。

これからニュースがあったら、ちょっと注目してください。たぶんほとんどの自殺者が中学生です。なぜなのか。中学生は非常に傷

つきやすく、傷つけやすい。しかも、その傷つき方はものすごくハードな傷つき方をします。そういう年頃なんです。

中学の教師が向き合わなければいけないのは、子どもの自立の課題です。「自立」を「自律」と書く書き方もありますが、私は自分で立つという自立を使います。意味合いが微妙に違うと考えています。

自立には、いろいろな自立があると思いますが、私は二つ挙げてみたいと思います。身辺自立と、思春期の自立です。

身辺自立の段階は、お尻が拭ける、靴のひもが結べる、衣服の着脱ができるとか、そういう自立です。これは幼児期の自立ですね。小学校の先生なんかは身辺自立ができていない子に小学校1年段階で向き合うわけですが、さすがに中学生ではそういう子はほとんどいません。

思春期の自立課題とはどういうものかという、自分の頭で考えて判断して自分で決める。やった結果を自分で受け止める。こういう課題です。

プリントに二つのロボットの絵が描いてあります。左側が鉄腕アトム、右側が鉄人28号です。両方とも私が子どもの頃にブレイクしたロボットマンガのヒーローです。皆さんは鉄腕アトムは知っていると思いますが、鉄人28号は知らない人がいるかもしれませんね。

私は中学生に出会うと、いつもこの二つのロボットの話をして聞きます。どこが違うと思う？子どもに聞くと、こう答えます。アトムは意思も感情もあるロボットだ。自分で考えて行動する。でも、鉄人28号はリモコンで操縦される…。

私はみんなに、誰かの言うなりになって行動する鉄人28号ではなくて、自分の頭で考えて判断して行動するアトムのようになってもらいたいと、いつも話をしています。

思春期は、「あしなさい、こうしなさい」という大人の指示どおりに動いてきた子ども

が、自分の内なる意思に基づいて行動するように変化成長する時期で、これが思春期の自立の課題になります。

ですから、大人が「あしなさい、こうしなさい」と言えば、それまではハイと素直に言うことを聞いていたのに、自分の中で一回問い直しをして、本当にそれをやらなければいけないのだろうか、僕は本当はこれをしたいのにとか、こっちの道を行けと大人は言うけれど、僕こういうふうに行きたいんだとか、そういうことを考え始めるのが、この思春期の自立の段階です。

中学生はまさに思春期ですから、どのようになるかという、大人の指示に従うのではなくて、自分で考えて自分の感情や要求に基づいて行動せよというもう一人の自分がいて、両者が対峙しながら道を選択していくという時期になります。

ですから、チャイムが鳴ったら教室に入って席について、先生が来るのを待っているものだという「あたりまえ」を、いったん問い直すようになります。そうすると、チャイムが鳴っても教室に入らない子どもの姿が出てくるというわけです。

入学した頃はちゃんとできていたチャイム着席ですが、2学期くらいになったら教室にも入らなくなる。そうすると教師たちの中にはこう考える人も出てきます。「入学した頃はちゃんとできていたのに、最近はできなくなっている。指導が甘いからいけないんだ。もう一回入学の頃に戻って、きちんと仕切り直しをしなければいけない。」

でも、私たちはそういう議論になったとき、次のように考えました。「できなくなったのでしょうか。それともしなくなったのでしょうか」。子どもというのは、言われた通りに行動する自分から、内なる意思に基づいて行動する自分へと変化成長していく…。中学生時代というのは、まさにそういう大きな変化の時期なんだと。

そして、このように話しました。「できなくなっただったら後退だけれども、内なる意思に基づいて行動したのであればしなくなったのであり、成長です。私たちは、子どもが内なる意思に基づいて行動し始めたとき、その子の内なる意思と向き合うのか、意思ではなく行動と向き合うのか…。それはすごく大事なことなのではないでしょうか。」

実際に、チャイム着席をしなかった子が3年生になったら自分で判断して席に着き勉強もするようになったし、クラスのリーダーにもなって頑張るなど、変化していきました。子どもって変わるんです。内なる意思に基づいて行動する子どもの意思や感情と向き合おうとしないで、行動をコントロールしようと思ったら本当に大変です。

だって、中学1年生のときはまだ背が小さいから。私は173cmくらいあるので、注意するときに「おい、何やってるんだ」と上から目線で注意できます。2年生くらいになると、「おい、何やっているんだ」と同じ高さです。3年生になったら、「おい、何やっているんだ。だめじゃないか」と上を見上げて注意しなければいけなくなってしまいます。

内なる意思に基づいて行動し始めるようになった子どもたちの、行動を力でコントロールしようと思っても無理です。背が大きくなかったって、無理です。本当は小学生だって無理なんです。私たち教師は、なぜその子がそのようにしているのかという、ワケと向き合う、意思と向き合う、感情と向き合うということをしていく必要があります。

(4) 生徒の内面の世界を聞き取る

つまりちょっと服装を崩してみたり、授業中に手紙を回してみたり、先生の話をかずに違うことを考えていたりするには、そのときのその子のワケ(事情)があるんです。イラついてドアを蹴ってみたりするのも、ワ

ケ(原因)があるんです。そのワケを理解しようとしなければいけません。

例えばある女の子が1時間目から一番前の席で爆睡でした。その先生はすごく準備をしてきて授業をやろうと思ったのに、目の前で寝られているものですからブチッと切れました。「1時間目から寝ているなんて、家に帰って寝てくれれば…」と言ったんです。そうすると、その子は「帰って寝てくれれば」の途中と最後の「ば」が抜けてしまって、「帰れ」と聞こえてしまったものだから、「帰るよ」と言って席を蹴って出ていってしまいました。

運悪く、私がちょうど用事でその前を通りかかったものですから、「どうしたんだよ」と聞いたら、先生が帰れと言ったと言う。あの先生がそんなこと言うわけないじゃないかと思いつつ、とにかく話を聞いていくと、「眠たかったから」って言います。「なんでそんなに眠かったの?」「きのう遅くまでテレビを見ていたから」「何でそんなに遅くまでテレビを見ていたの?」…。実は部活が終わるのが6時。家に帰ってくると6時半。そして7時から塾で、9時まで。その子が行っている塾は進学塾で、お兄ちゃんがその進学塾を出て有名な高校に入った。だから、親はその子もそういう塾に行けば有名な高校に入れるだろうということで入れたわけです。

ところが、その子は分数の足し算がおぼつかない。だから、その塾の授業にはついていけない。でも塾を変えるわけにはいかない。塾は親切だから補習をやってくれる。…で、普通の子は7時~9時だけけど、9時から11時まで補習を受ける。

11時半くらいに家に帰って、すぐお風呂に入って寝ればいいのに、テレビを見ないといけない。そうしないと、明日ドラマの話になったときに友達の話の中に入れない。それでビデオで録画したものを見る。寝るのが1時、2時になってしまう。そうすると、朝は朝練があるので、早く起きていく。それで1時間

目から爆睡となる…。

そんな話を聞いてしまったら、「大変だな」と言わざるを得ないでしょ。そうしたら、「でもね、先生、私は小学校のときに先生の言いつけを守らないで宿題とかやらなかったし、だから分数ができなくなってしまっている。だから、その頃のバチが当たってるんだ。それにね、お兄ちゃんと違って私バカだし」って、こう言うんです。

もう本当に抱きしめたいくらい、かわいくなってしまいます。「帰るよ」と言ったときの眉毛が10時10分の角度の顔と今の8時20分の眉毛の顔を比べると、別人みたいです。もし私たちが「帰るよ」と言って席を蹴って出たその姿、行動だけを改めさせようとしたら、憎たらしい子どもです。「何だ、今の言い方は」「うるせえ」となってしまいます。だけど、ワケに向き合っていくと、抱きしめたいくらいかわいい中学生の姿が見えてきます。思春期の子どもと向き合うときは、いとおしさの質を変えなくてははいけないのです。

(5) 甘やかすことと甘えさせることの違い

そのように子どもの言い分を聞いてあげるというのを、「甘やかすことだ」という人がいます。そこで皆さんには、甘やかすというのはどういうことか、ちょっと考えてみてほしいんです。

靴ひもが結べるということを考えてみてください。身辺自立の段階で甘やかすという言葉を使うときは、その子にそのことをやらせないということでしょう。靴ひもを結べば、最初の頃は子どもなんて左と右、反対に履いてしまうくらいですから、うまくできません。ひもが縦になったりしてなかなかうまく結べない。でも、失敗してもいいから、その子が自分でその体験を重ねると、できるようになります。これが甘やかさないということでは

よう。失敗してもいいから、そのことをちゃんとその子に体験させる、自分でやらせるということが甘やかさないことです。

逆に朝、保育園に連れて行くのに、その子にひもを結ばせていたら時間がなくなってしまふから、お父さんがその子に代わってやってあげちゃう。そうするとその子は失敗はしない。でも、できるようにもならない。こういうのを甘やかすというんだね。

思春期というのは、言われたとおりに行動する自分から、内なる意思に基づいて行動する自分へと変化、成長していく時期。その体験を通してアトムみたいになっていくじゃないですか。靴ひもは身辺自立の段階の自立課題。では思春期の自立課題、どうやったら自分の頭で正しく先の見通しをもって判断することができるようになるか。それはそういう練習をしなければだめです。

だから、自分で考えさせてやらせることを保証することが甘やかさないことなのに、なぜか大人の言うとおりに従わせることを甘やかさないことだと、勘違いしている人たちが結構います。

思春期の甘やかさないということは、「君が決めていいんだよ。君はどうしたいの」ということを丁寧に聞いてあげて、自分で考える時間を保障することなんです。でも「君が自分で決めることだ。勝手にしなさい」と言って突き放したら、その子は自立の道を歩めるかという、そうはいかない。だって、自分で決めて自分でやる、責任も自分でとるのは結構しんどいですよ。心細いし、失敗したらどうしよう。もう取り返しがつかないかもしれない。見捨てられちゃうかもしれないと、きっと悩むでしょう。

そういう体験はありませんか。そういうときに必要なことは、そばにいて、支えてくれる人でしょう。誰かがそばにいてくれて、絶対に見放さない人がいて、「大丈夫だよ、応援しているからね、だから、やってみてごらん」、

このように言ってくれる人がいればたたかえます。

子どもが悩んでいるときに、そばにいて、それを支えてあげる存在になる。これは甘やかすということではありません。同じ「甘」という字を書くのですが、「甘やかす」のではなく「甘えさせる」ことです。中学生はこの自立課題に挑戦する時期にいるので、その子が自分で考える、自分で決める、悩む、迷う、やってみる、失敗する、挫折する、くじける。こういう体験をさせることが必要なだけでも、そのときに「大丈夫だよ」といって支えてくれる人がそばにどうしても必要です。これは甘えさせることです。

思春期の子どもに必要なのは、甘やかされなくて甘えさせてもらう、こういうことが必要なんです。実習生の皆さんにそういう実践を求めるのはムリですが、そんな目で子どもたちの行動を見つめてもらえたらいいと思います。

(6) いじめが起きるのは自然なこと

さて、今日のもう一つのテーマです。中学校で起きているいじめの問題を、どう考えたらいいのか。皆さんの中には、自分の小・中・高時代にいじめはなかったよという人もいます。だから、今新聞や何かで報道されているようないじめ事件は、特別な学校の特別な出来事なんだと考える人もいます。

でも、いじめはどここの学校でも起きています。だから、いじめ調査で4万件とかありましたが、おそらくそんな数ではないでしょう。皆さんは「いじめ」という言葉を聞いたときに、どんな出来事を想像しますか。大津で起きたような自殺に追い込んでしまうようなひどいレベルを考えますか。

文科省の定義では、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から心理的、物理的な攻

撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」を「いじめ」と呼びます。大津で起きたように、暴力を受けたり金を取られたり、性的ないやがらせをされたりするのは、もちろん精神的、物理的な苦痛を受けています。それはこの定義によれば、当然いじめです。

では、そこまでいかなかったら、いじめではないのか。例えば教室でA君が近くにいたB君に「消しゴム、貸してくれな」と言って持っていかれてしまいました。そして持っていった子は非常にだらしない子で、自分が持っていったことも忘れてしまって、そこに置きっぱなしにしてしまいました。そうしたら、取られた子はその消しゴムがなくなってしまったことになります。「ねえ、消しゴム返してよ」「あそこに置いておいたよ」「あそこって、どこ?」「あそこだよ」「ないよ」「知らねえよ、おれ、置いたもん」と言われたとき、このことで精神的な苦痛を感じたら、文科省の定義によれば、これはいじめです。だから、いじめというのはどこの学校でも起きています。これが継続していくと、そのダメージがどんどん大きくなっていくわけです。

ちょうど皆さんが生まれた頃だと思いますが、1994年という年は、私にとっても子どもと教育にとっても特別な年です。子どもの権利条約がわが国の国会で批准された年でもありますし、その秋、愛知県西尾市の中学二年生、大河内清輝君がいじめが原因で自殺をした年でもあります。

ふりかえてみるとその頃、いやそれ以前から、私が担当した学年、クラスで、いじめの起きなかったクラスは一つもありません。もちろん、取り組みによって、なくなってはいきますが、いじめがまったく起きなかったクラス、学年はないのです。子ども同士の関係の中でトラブルはつきものですし、そのとき誰かが苦痛を感じています。私に言わせれば、生まれも育つ環境も違う子どもが共同生

活をする学校において対人トラブルは必ず起きます。そしてその対人トラブルの中で一方が苦痛を感じれば、それはいじめということになる（文科省の定義）のですから、いじめはどこで起きてもあたりまえということになります。子どもがあれだけの空間に長時間おかれて共同生活をすれば、そういう対人トラブルが起きないほうがおかしいとさえいえます。むしろこれまで子どもは、そうした対人トラブルと向き合い解決する体験を通して、思いやりの心とか、友だちと連帯することとかを学び身につけてきたはずで、この学びは子どもの自立にとって必要な「甘やかされない」体験です。しかし、今はそれを解決の方向に向かわせるのでなく、逆にこじらせて、ひどくしてしまうという現実があり、結果として自殺にまで追い込むような事態になっているのだと考えます。問題なのは対人トラブルとしての初期のいじめが起きることではなく、いじめを深刻な事態にせず、いじめ解決を子どもの学び体験にするような大人の側のサポートができていないことなのです。

(7) いじめの様相

次に、ある中1の女の子の作文を読みます。

「いじめをなくしたい、これは誰もが思うことだけれども、願望だけでいじめがなくなったら苦労はしない。やっているほうは、相手、やられているほうのことなど、なんとも思っていない。その人が嫌いだからという理由もあるだろうが、いじめの理由の8割はストレス解消、別に誰だっていい。自分のストレスがなくなればいい。

いじめをやる人は自己チューである。いじめられている人は心の底から苦しんでいるのに、しかし困ったことに、いじ

められている人はそのことを話さない。本当は話したいのに、助けを求めているのに。大人たちのほとんどは、いじめられたら言ってね、助けになるからというが、いじめられる人は言わない。いや、言えないのだ。

先生や大人に言うと、助けになってくれる。そしていじめている人へ、もういじめてはいけないなどと言う。そして、いじめた人が『ごめんなさい』と謝る。これで一件落ち着いた気がするが、そんなことでいじめは収まらない。

昔はこれで大丈夫だったのだろうが、残念なことに、最近のいじめはとても悪質だ。いじめた人は、とりあえず『ごめんなさい』とまるで心から言っているような顔で謝る。それで大人は許してしまうが、しかし大人の気づかないところでいじめはまだ続いている。大人の前でいい顔をしていた、いじめた人は、誰も見ていない裏で『おまえ、チクっただろう』と脅し、いじめは前よりも強力になる。

それを恐れて、今いじめられている人たちは誰にも訳を話さずに、1人で悩み、ストレスをため込むのだ。いじめ、それはみんながかかわっていることであり、みんなでやめさせるべきであると、私は思う」。

いじめは起きます。しかし、教師の対応によっては、この初期のいじめをひどくしてしまう。その結果最初に言ったように、指導すればするほど深化して見えにくくなり、先生との関係も悪くなっていくという状態になります。

例えば先ほどの消しゴム事件が意図的だったとします。Aという子がBという子にいやがらせをしたとします。Bは泣きました。先生に訴えました。さあ、こういう事件があったら、どうするでしょうね。よくあるパター

ンです。

今の子が指摘しているのは、こういうことです。先生は A を呼びます。そして、「おまえ、そんなことやっているのか。今日だけじゃないだろう。ずっと続いているから、B はとてもつらくて学校に来られないと言ってるぞ。不登校になるかもしれないぞ。これはいじめだ。分かっているのか。どうなんだ、またやるのか」。

「もうしません」「悪いと思っているんだろう」「はい」「じゃあ、B に謝れ」というので、B を連れてきます。そして、「今 A に話した。A はもうしないと言っているから、許してやれ。A、ちゃんと謝れ」「〇〇をしてすみませんでした」「ほら、もう謝っているから、許してやれ。いいか、許してやれ。いいな」「はい」「よし、じゃあ、2 人で握手だ」。

最悪の場合はハグしろとか言っていて、それで仲良くなって、「みんな、仲良くしないといけないんだ」…。もしこれで終わると、中 1 の子が言っているように「おまえ、チクつただろう」となっていきます。

いじめの構造と力学

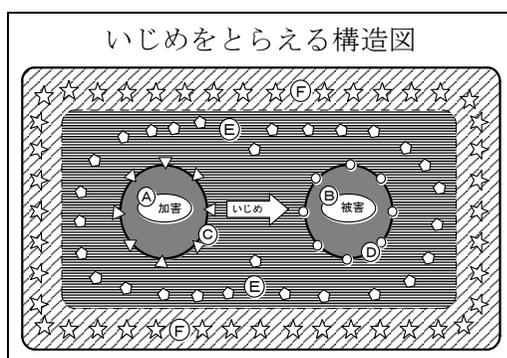
いじめは A が B をいじめるだけではなく、必ず A のまわりに取り巻き C がいます。だから A を指導するだけでなく、C のことも視野に入れなくてはなりません。

しかし、よく見てみると B は本当に孤立している場合もありますが、支援者にはなっていないなくても、比較的 B のことを知っている子、心を痛めている子がいます。これを D とします。子どもの場合、「大丈夫だよ」と言ってくれる支えになる人がいると、たぶん死なないで済みます。私はこの D を支援者といっています。

いじめを、A (加害者) と B (被害者) だけの問題として対処してしまうと、いじめは深化複雑化していきます。C の存在や D の存在をちゃんと見抜かなければいけません。そ

れから、学級や部活の中にはさらにたくさんの人 = E がいます。この E が学級の集団の雰囲気をつくる鍵を握ります。この空気の中でいじめができたり、あるいはできなかつたりするわけです。

マスコミや評論家の中には、この E を「傍観者」と呼ぶ人がいますが、私は傍観者ではないと思っています。E は立派な当事者です。当事者が A から E までいるんです。教師がいじめの問題を考えるとときに視野に入れなければいけないのは、A から E までの当事者です。これをどうするか。



例えば A、B、C だけの関係で考えれば、2 者が B をいじている形になっていますが、もしここに D を存在させれば数は同じになりますし、この周辺の当事者がもし B の側についていけば、A たちは少数派になります。こうなるといじめはできません。このようにしていじめの指導を考えるとときには、A を反省させるという指導だけではなく、B や C、D、E、そういう集団を考えなければいけないのです。

皆さんが実習に行ったときにそんなところまで見抜くのは容易ではありませんが、例えばもし誰かつらそうな思いをしている子がいたとして、そういうのを発見したら担任の先生に言うことも大事ですが、言われている子、言っている子、その周辺に C や D はいるのか、E たちはどういう存在になっているのかをみ

てください。

例えばこういうことが起きているときに、直接の当事者ではないけれどEも見て知っているながら注意できない自分を責めているかもしれない。このクラスの雰囲気がイヤだっ
て感じているかも知れません。

それからさらに言うと、この教室は社会から隔絶したところにポコッとあるわけでは
ありません。例えば先ほどの女の子の作文ではいじめの8割はストレス解消といっていました
が、A君がストレスを感じている理由、背景にはお家の問題があるかも知れません。先
ほどの分数の足し算ができない子、お兄ちゃんと比較されて、「お兄ちゃんはしっかりして
いるのに、何でおまえは」ともし言われ続けているのに、すごいストレスになるでしょう。
そういうワケがあるかも知れません。

さらに子どもたちの生活、社会というのは、大人社会・文化と無縁に存在しているわけ
ではありません。日本社会という大きな世界の影響を受けています。図のFはそのことを言
っています。キュウリやキャベツを塩水に漬けておけば漬け物になるように、現代を生き
る子どもたちも、この現代社会や文化の影響を受けて「今の自分」をつくっています。子
どもたちの今の姿は現代日本社会の反映であり、この教室だけ社会から隔絶された理想郷
とすることはできません。子どもの今を問うということは、現代日本社会を問うというこ
となのです。

問題は教師がそのことに気づいているかど
うかです。例えばネット社会の問題、LINE、**Facebook**。最近私もそこに
つながってみたら、いろんな人から友達になろうという誘いが来て大変な
ことになりました。同じ学年の子どもたちからも来て、この子とこの子、こ
ういうふうにつながっているんだと思って、すごく面白かったですが、何
か見てはいけないものを見たような思いも半分あります。そういう影
響を受けながら、この子たちは今を生き、

いじめの問題もそういう中で起きているわけ
です。

いじめを解決するとはどういうことか

そしていじめの問題でどうしても言わなければいけないのは、何をもっ
ていじめ解決とするのか、ということです。大人や教師からの指導があ
って、AからBへのいじめが止まった、なくなったとします。そうしたら
それでいじめ問題解決なのかということです。

AからBへのいじめが止まるのはどんな場合かを考えてみましょう。Aが
自らやめる。Bがたたかって勝つ、あるいは逃げる。Dが静止する。B、
D、Eが連帯する。つまりAとCだけの少数派になる。そしてCも離
れてしまって、Aが孤立する。いろいろあるけれど、単純な発想として
はAをこの空間から排除してしまうこと。そうしたらいじめはなくなる
ね。今言われている厳罰、出席停止、強制保護、監視というやり方は、
Aをここから外してしまえというやり方です。でも教育の問題として考
えた場合、これで解決＝落着いていいのでしょうか。

なぜやめるのかという点でいうと、やめる理由は、いじめをする必要
がなくなるという場合と、いじめができなくなる場合と二つあります。
もしいじめをする必要がなくなったのならいいのですが、いじめが
できなくなったんだとしたら、なぜいじめるのかといういじめる側が
抱えていた問題はどうなってしまうのでしょうか。

①ストレス解消、②精神的に不安定、③何らかのヘルプ信号としてい
じめをやっている、④いじめられないための防衛行動。この子の事情
があって、いじめという行為で何とかバランスを取っていたのに、こ
の子からいじめという手段だけ、方法だけを取り除いてしまって、こ
の子が抱えていた発達上の問題についてメスを入れないならば、こ
の子はちゃんと発達していくことができるのでしょうか。こ

の子は自分のストレスを、いじめという方法で解決しようとしていた。これは明らかに間違っただけでも、では本当はどうやってストレスの原因を解決すべきだったのかということは、いつ学ぶことができるのでしょうか。

大津で起きたような事件は犯罪ですから、きちんと外部機関がかかわって対処をしなければいけないと思います。あそこまでいってしまえば、学校の教師の力だけでは克服できなかったでしょう。でも、そこにいく前の段階で、なぜこの子がそういう行動を取らざるを得ないのか、そのことに心を寄せていくことを教師がしなければいけないのではないか。

それには時間がかかります。でも時間がかかるからと言って、Bには「いじめられていても我慢してほしい」と言うしかないのか。そんなことはできません。だって、Bは今つらくてたまらないんだもの。この子の心と身体を救わないとだめです。

先ほどの消しゴム事件のような段階でも、Bの心を救うためには、「大丈夫だよ。安心できるよ」とするための方策を教師はとらなければいけない。それは何かというと、DやEがサポーターになってBを守る心を支えるということです。

私はどうしたかということ、「君のことを分かってくれる子って、このクラスにいる？」って聞きました。「います。あの子とあの子」「よし。じゃあその二人に来てもらって、一緒にこの話をしよう。絶対に支えになってくれるからね」。それで呼びます。君たちもBのつらさは分かっていると思うから、ぜひ一緒にいてほしいんだ。いじめが行われているときに「やめろよ」って言えたらいいけれども、ムリして言わなくてもいいよ。その代わりに、暴力など危ないことがあれば先生を呼んでほしい。そしてそばにいて、あとで、「大変だったね。よく頑張ったね」とひと声かけてあげてくれる？　そしてあとで必ず先生に知らせてね。

このように言って、Bの心の支えになる人を必ずつけます。もしBが誰かを指名できなかった場合は、担任が「この子は大丈夫だ」という子を指名して、一緒に支えてあげてほしいと頼みます。そしてBの支えになるような形をつくっていきます。

もし最終的にクラスのほとんどがBの支えになれば、当然いじめはできなくなるわけですが。そうだとすると、次の課題としてAの背景に寄り添うということはどうしても必要ですが、これは時間のかかることであり、すぐにしなければいけないのは被害者の痛みを和らげるということです。

(8)「楽しい学び」の工夫は教師の専門性

教師の専門性とは何かということを最後に少し話したいと思います。これは教える分野のことをよく知っているということは当然です。だからと言って、社会科の先生になる人が、はじめから全部知っているわけではありません。これも当然です。これからやればいいんです。でも、教育実習の間、この範囲の指導をするんだよとさきとと言われると思いますから、せめてその分野だけは詳しく勉強して、物知りになっておいてください。これが教師の専門性の1番目で、教える分野のことを知っているということ。

では、詳しく知ってさえいれば教師の専門性はオッケーかということですが、そうはいかない。分かるように教えるということが必要です。井上ひさしさんが、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく…」ということを言っています。これは教師にとって永遠の追究課題です。

私は教師という仕事を選んでよかった、教師は本当に面白い仕事だと思っていますが、そのいちばん大きなポイントは、子どもにあ

った教材や教え方を工夫する楽しさです。いじめ解決も同じです。そして分かってくれたときは本当にうれしいです。

皆さんも3週間の実習で、自分の与えられた分野で、どうやれば子どもに自分のメッセージが伝わるか、どうやれば理解してもらえるか、どうやれば楽しく分かったと思ってもらえるか、これから工夫していってもらえたらとても幸せです。

これで、私の話を終わります。どうもありがとうございました。(拍手)